

健康登山20: 自然歩道09(宇治～宇治田原)

コース	宇治駅 2.5km/34 1.1km/16 然公園 1.1km/31	もみじ谷入口 1.1km/27 くつわ池 2.4km/30 六石山 2.3km/48	白山神社 2.5km/54 郷之口 1.9km/26 天ヶ瀬ダム下 2.6km/33	車道 1.8km/39 公園登り口 1.8km/39 宇治橋	自
水平距離	19.2km		断面図 縦軸：高度m 横軸：距離km		
水平換算距離	17.0km				
累計高低差	登り702m、下り704m				
標準歩行時間	5:40				
実績歩行時間	5:54				



山行報告

山行日 2007・1・11(木) 天候 晴れ 参加者 6名

京阪宇治駅8:26 もみじ谷入口9:03 白山神社9:28 車道10:15 くつわ池自然公園
 行動 口10:38 郷之口11:11 田原川11:30 自然公園登り口11:46 自然公園12:21~13:
 00 六石山13:48 天ヶ瀬ダム下14:45 宇治橋15:20

記 録

今回は宇治から東海自然歩道を南下するのだが宇治田原町の郷之口までが3時間、そこから和東町の原山までは3.5時間の行程である。しかし原山からの交通の便が悪いため、郷之口からくつわ池・六石山を経て天ヶ瀬ダムへUターンするコースとした。

したがって往路は東海自然歩道、復路は周辺の山という組み合わせコースになった。

京阪宇治駅から吊り橋を渡り、もみじ谷を登り白山神社に参詣した。ここまでは宇治市主催のスタンプラリーで多くの人が訪れるところである。白山神社からは林道や山道の快適なハイキングコースとなるが、くつわ池の手前から交通量の多い車道を歩かねばならない。

くつわ池自然公園の入口を通り過ぎ、分岐を左に入ると交通量も減りホットする。車道を下りきったところが郷之口である。郷之口バス停まで行き、ここで東海自然歩道と別れた。

この後、町並みを横切り田原川に出て左岸を下流方向へ向って歩いた。宵待橋へ向う府道62号線に合流し送電線下から自然公園に登った。休園日で人影は少なかったが休憩所で昼食をさせてもらった。正面に次回登る予定の大峰山の山塊が見えた。

昼食後は自然公園の展望所を散策した、フィールドアスレチック等の設備もあり子供連れであれば楽しめそうである。道標に従い尾根道を辿るとほどなく六石山山頂に着いた。この自然公園から天ヶ瀬ダムに至る山道は高低差もなくハイキングに好適である。正面にゴルフ場が見えるとすぐに府道3号線の天ヶ瀬ダムの下部に出る。

往路は右岸を通ったので左岸を歩き堤防から平等院を垣間見ながら宇治橋へ向った。

往路に3kmの車道歩きがあるが、歩行約6時間の適度なハイキングコースだと思う。

自然歩道 (宇治～宇治田原～六石山～宇治)



宇治を出発
8:35



吊り橋を渡る
8:54



白山神社にて
9:27



郷之口へ向う
10:11



自然公園から
大峰山
12:44



自然公園散策
13:22



六石山にて
13:48



天ヶ瀬へ向う
13:59



平等院
15:13



ゴール宇治橋
15:20

名所・旧跡ミニガイド（自然歩道：宇治～宇治田原郷の口）

参考資料、伏見歴史の旅 / 京都滋賀南部の山 / 他より

宇治橋：古代は「瀬田の唐橋」「山崎橋」日本三大橋と呼ばれた。現在は三古橋。
646年大化の改心の翌年(大化2年)奈良元興寺の僧「道登」によって初めて架けられた。現在の橋は1996年に架け替えられた平成の橋、橋長155m、幅員25m、擬宝珠は現存する最も古い寛永3年(1636年)刻印がある擬宝珠の形状と大きさにつくられている。

橋寺法生院：通称は「橋寺」古くから宇治橋を管理したので通称名で知られている。
雨宝山法生院常光寺(真言律宗)が正式名、寺伝によると、聖徳太子の本願により秦河勝が宇治橋を架けたときに、あわせて創建されたと伝えるが、聖徳太子が宇治橋をつくったという史料はない。

宇治橋断碑：「橋寺」本堂の前庭にある。宇治橋を架けられたいきさつを刻んだ石碑(重文)寛正3年(1791)上部の1/3の断片が発見されて寛正5年現在の姿に復元された。(群馬県の高胡碑、宮城県の高賀城碑とともに日本三古碑である。)

橋姫神社：橋姫神社：祭神は瀬織津比咩尊(瀬織津姫)=天照大神の荒魂。摂社は住吉神。宇治川上流の櫻谷に鎮座まします瀬織津比の神を橋上に奉祀、「宇治橋の三の間」は鎮座の跡。その後宇治橋西詰に移されたが明治3年洪水で流失現在地にいたる。

橋姫伝説として、貴船神社の丑の刻参りの話など、さまざまに変化して縁切りの神、悪霊を絶つ神として信仰されている。

宇治川の川波の音が激しい夜は、宇治神社の男神が橋姫のもと通うのだと言われる。

(通園茶屋前に昭和11年当時に架けられた三の間のモニュメントがある。)

通園茶屋：平安時代の永暦元年(1160)からの創業、現店舗は江戸期の遺構を残す。
源頼政の家臣古川右内が頼政の一字をもらって大敬庵通園政久と名乗り庵を構える。宇治川の合戦で討ち死に、墓は平等院の庭にある。子孫は代々通園を名乗る。

古川英治の「宮本武蔵」に通園茶屋でお通さんが休憩したところ。

恵心院：宇治神社の南にある。創建は不詳、寺伝では寛弘2年(1005)恵心僧都、源信が再興したという。春日の局が、幼君竹千代のため安穩祈願をこめた寺でも

ある。

興聖寺琴坂：緩やかな坂道の脇を流れる水のせせらぎが、琴の音に似ているから琴坂と呼ばれるようになった。石門から竜宮門へのびる長さ 200 禰の琴坂は紅葉の名所。春は櫻、山吹が咲く。

宇治川水力発電所：大正 2 年(1923)近江南郷から宇治にいたる落差 60m の水路を開削して建造したもので、これを皮切りに、宇治川に発電所やダムが建設されるようになった。

天ヶ瀬吊橋：平成 9 年に修復された。ワイヤー吊り下げ部分を除きほとんどが木製です。高さ 7m、長さ 55m

もみじ谷：イロハカエデがたくさん植えられている小さな谷。

白川の里：平安時代後期から室町時代にかけて「白川十六坊」といわれるほど多くの坊舎が立ち並んでいた。その中でも中心的な御堂が白川金色院であった。白川十六坊も江戸時代に多く衰退し、幕末まで残った 3 坊も、明治維新後に廃絶した。

地蔵院：藤原寛子^{かんし}が建てた金色院 16 坊の一つと伝えられ、金色院に関する仏像、梵鐘、京展、文書など多く所蔵。白山神社の神像や仏像も保管する。

金色院跡：藤原寛子(藤原道長の孫、後冷泉天皇の皇后)が康和 4 年(1102)金色の獅子を夢に見、此処に寺を建てた。本尊は大聖文殊菩薩、堂舎には金が散りばめられ金色院と名づけられた。本堂のほか多くの堂塔や坊舎を擁していたと伝えるが現在では白山神社と惣門と寛子の供養塔と言われる九重石塔が残るのみである。金色院跡には石碑がある。

白山神社：8 世紀後半に疱瘡が流行った時、その治癒を願って創建されたと言う。祭神は伊邪那美^{いざなみのみこと}命、やがて藤原寛子が建立の金色院の鎮守社として勧請された。拝殿(重文)は鎌倉時代の建物で寄棟、茅葺きの優雅な姿をしている。建治 3 年に建立されたもので宇治離宮の遺構と伝える。

くつわ池：池の名は香達池^{かだちのいけ}、貝津輪池^{かづわいけ}、轡池^{くつわいけ}、くつわ池、と移り変わっている。天長 8 年に香達池(現上池)が開かれた、江戸時代に田原の奥田治作が私財と

歳月を費やし農業用水として新池(現下池)を完成させ、その形が馬の口につける轡くつわに似ていたところから、くつわ池、と呼ばれるようになった。
現在のくつわ池は釣堀として利用されている。(末山、くつわ池自然公園)

六石山 : 山頂一帯は久御山町の飛び地。北は宇治市に属す。地名は宇治市填島六石山。
宇治田原町史では「六石山」「六国山」と記載。三角点名は「末山」という。
久御山町役場では三郷山と呼んでいる。宇治、宇治田原、城陽の三つの郷くにの境の意味かららしい。正式な山名はくつわ池伝承にも出てくる六石山が有力。

十三重石塔 : 宇治川の塔の島に立つ、現存する日本最古の石塔(重文鎌倉)高さ 15 尺
約 700 年前、西大寺の僧「叡尊」は全ての生き物を仏の子として命の尊さを説き続けていた。洪水で宇治橋が流され、この急流を押し渡ろうとして、多くの人馬の生命が失われるのを憂い、橋の再興を図るが、彼が衝撃を受けたのは杭に網代を張って両端に釜せん(ざる)を仕掛けて、ごっそり魚を取る残酷な風景であった。魚は宮中に献上され、加茂社に奉納されていたので、禁止することは容易でなかった。

弘安 7 年、ようやく太政官付にて、宇治の網代漁法の禁止が発令された。魚の命を助ければ、漁民の生活を奪う、「叡尊」は、そこで宇治橋の再建工事に漁民を雇うことにした。宇治橋の再興がなったあと、漁民の差し出した、網代木、釜せんを焼却し宇治川の小島に埋め、その上に十三重大石塔を建立する。山を削り、土を運んで、浅瀬に舟形の小島を築造した。大変な工事であったが漁民もよく立ち働いた。

「叡尊」は、この石塔の内部に仏像と、経典を納め、塔には「佛徳によって救われる」という梵字を彫り、台石には、宇治橋の安泰、魚貝鳥獣類の霊供養、合戦、戦乱で生命を失った人達の鎮魂を祈念する願文を刻み込んだ。
また、宇治茶の栽培への転業にも力を注ぎ、漁民の生業のために尽力したという。

平等院 : 元は源融みなもとのおるの別荘宇治院だが、のちに藤原道長の手へ帰し、子の頼道に受け継がれ宇治殿と称した。末法の初年とされた永承 7 年(1052)3 月に天台宗の平等院として本堂が落慶、翌 1053 年阿弥陀堂が落成したのが現在の鳳凰堂(国宝)です。

また多宝塔が藤原寛子かんし、法華堂、五代堂、経蔵などが、藤原氏一門により建立されたが、源頼政みなもとのよしまさが平家と戦い自刃、堂宇の多くが焼失、さらに楠木正成によって焼かれ、応仁の乱で衰亡、鳳凰堂のみが往時の繁栄をしのばせ

ている。

橋姫伝説 : 橋姫は橋守の娘で、言い交わした男に七尋のわかめを、食べたいといったところ、男が伊勢の海に出かけて行って、誤って溺れ死んだ、待てど暮らせど男が帰ってこないの、橋姫が伊勢の海辺へ尋ねていくと、男の霊が現れて、『さむしろに 衣かたしく今宵もや 我を待つらむ 宇治の橋姫』と詠んで消えうせたと言う。(古今和歌集巻十四、詠み人知らず)

〔さむしろ = 筵^{むしろ}/寒い、衣片敷く^{ころも} = 独り寝の意/男女が逢うときは二人の衣を敷いた〕

同じ話に、一人は橋姫(懐妊中)で二人の妻を持つ男が、橋姫のため、わかめを採りにいったが、採れないので仕方なく、笛で「青海波」曲を吹いていたら、竜神の婿にと連れ去られた。三年も男が戻らないので、探しに行くと竜神の使いの者に遭う、そこで「声を掛けてはならない」という約束で男に逢わせてもらえるが、

『さむしろに、衣かたしく今宵もや...』のうたを繰り返すだけで、詠われたのは橋姫の名のみ、嫉妬したもう一人の妻は、我を忘れ、男に掴み掛かろうとすると、男も、竜神の使いの者も消え、(二人の女は)子安貝の落ちた浜辺に、取り残されるのであった。(子安貝は古くから安産のお守りとして知られる)

橋姫伝説 : 都のある嫉妬深い女が、男の心変わりを恨み、相手の女を呪い殺そうとして、貴船の社へ願をかけた。そして神示に従って宇治川に三七日間(21日間)浸たり、生きながら鬼となって女を取り殺したという。

その後、陰陽師安倍清明^{あべのせいめい}の操る神によって追われ、愛宕山に逃げ込むが、京の町に夜ごと出没し、男女がまわらず命を奪い取るようになった。渡辺綱^{わたなべのつな}、坂田金時^{さかたのきんとき}が成敗に行くと、鬼女はすぐさま降参し、「これからは、もう災いをもたらさない。私を弔って欲しい。そうすれば、王城を守る神になろう」と言い終えると、鬼女は宇治川に飛び込んだ。

百人の僧が法華経を唱え、神社がつくられ、橋姫と呼ばれるようになった。